



ヤンキーは異世界で 精霊に愛されます。1

ALPHAPOLIS

黒井へいほ
Heiho Kuroi

アルファライト文庫 

Headline loved
by the sprits.

CHARACTER 主な登場人物



アマリス (アマ公)
オルフェン王国の姫騎士で、グレイスの姉。後先考えない性格。

リルリ
グレイス付きのメイド。主人には従順だが、裏の顔も持つ。

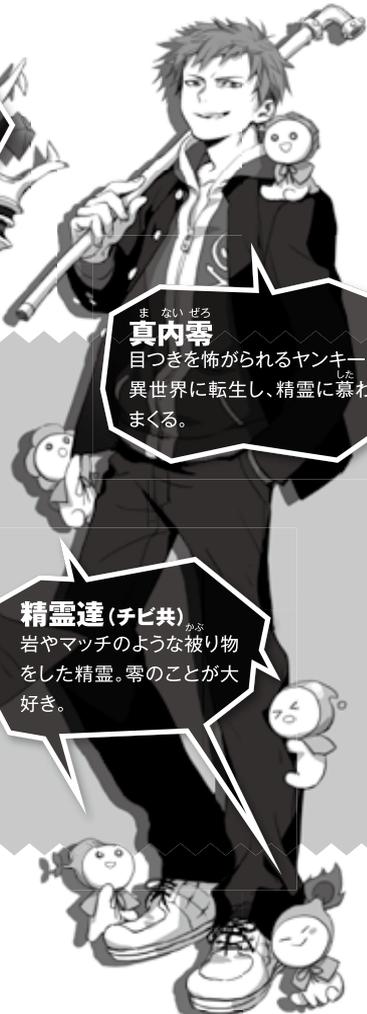
エルジー
カーラトの町で暮らす鍛冶職人。

グレイス (グス公)
オルフェン王国の第二王女。「あわあわ」するのが癖。



真内零
目つきを怖がられるヤンキー。異世界に転生し、精霊に慕われまくる。

精霊達 (チビ共)
岩やマッチのような被り物をした精霊。零のことが大好き。



第一話 やべえ、死んだわこれ

「お、おい。あれ真内零だぜ」

「ヤクザも避けて通るって噂のあれか。やべーな、目が超怖え」

「ちげーよ。バックにヤクザがいるんだってよ」

ちっ。聞こえてんだよくそが。学校から帰るだけでもこれか。

俺はただ道路を歩いているだけだ。取り巻きみたいなのが後ろに何人かいるが、それだけだ。

ムカつきながらも、俺はこそそと会話してる男共の横を通り過ぎようとした。後ろにいる奴らも、こいつらを相手にせず、俺に続くと思っていたんだがな……。

そうはいかなかった。俺の取り巻き共は、ぼそぼそと噂話をしていた奴らに絡みやがった。

「おい！ てめえら何こっち見てんだ!? ああ!？」

どうにも我慢ならなかったみてえだ。

つたく、いちいちどうでもいい奴に絡むんじゃねえよ。明らかにビビッてるじゃねえか。

「ひいっ！ すみません！ すみません！」

「零さんに用があるんなら、直接こっちに来て言えや!!」

「ないです！ すみません！」

俺はただ家に帰りたいだけだ。

なのに、しよべえ奴らに絡みやがって……。

「いいからこっち来いや！」

「ひいひいひいひい」

「やめろ」

俺は取り巻きの右肩を掴んで止めた。

「で、でも零さん、こいつらが……」

「俺はやめろって言うてんだよ」

俺がギロリと見ると、取り巻きは顔を引きつらせて真っ青になりやがった。

「はい！ お前ら運が良かったな。さっさと消えろ！」

「あ、ありがとうございます！」

あいつら、慌てて走って逃げて行きやがる。

ちらちらと後ろを振り返りながら、怯えた目で俺を見てんじやねえよ。俺は何もしてねえだろ。

どいつもこいつも、俺にビビってデタラメな話をする奴らばかりだ。

今、俺について来てるこいつらも勝手に付きまとい、俺の名前を出す。つまり俺を利用したいだけなんだろう。

家に帰れば、家族は俺を化け物でも見るかのような目で見やがる。ちよつと目が怖いくらいでビビりやがって。

「いやー、それにしても零さんはすごいっすね！ こないだもどつかの馬鹿を、前蹴り一発ノックアウトっしょ！ まじリスペクトっすわ！ ヤクザだつて道を譲りますからね！ 最強の高校生っすよ！」

「ちっ。あいつが弱かっただけだ」

「ははっ。トレードマークの茶髪のざんばら髪が今日も決まっていますよ！ ナチュラルヘアってやつっすかね」

こいつは、地毛を手入れしてねえだけだと何度言っても聞きやしねえな。

それにしても、外を歩けば俺が気に入らねえとケチつけて来る奴だらけだ。喧嘩売られて悪名ばっかり広がりがやる。俺を理解して愛してくれる奴なんて誰もいねえ。

この取り巻き共は、ベラベラとどうでもいいことしか話さない。俺は、さっさと家に帰りてえんだよ。

「そうだ！ 零さん公園で一服してきませんか？ 飲み物買ってきますよ！」

「俺は家に帰ってえんだけだな……」

「ちよつとだけ！ ちよつとだけお願いしますよ！」

「ちつ。ちよつとだけだぞ」

断りきれない俺にも問題があるのか、これは。あー、うざつてえ。

俺の返事に、周りの奴らは「さすが零さん」だの「男気が」だの、勝手なことばっか言つて盛り上がりつつやがる。ハイタッチしたり、大声をあげたり……何がそんなに楽しいんだ。てめえらちよつと俺が公園に付き合うくらいで、騒いで喜ぶんじゃないよ。ちつ。面倒くせえな。

道路を挟んで向かい側にある公園に、仕方なく足を向ける。

「あれ？ 零さん、見てくださいよ。公園からボールとガキが……」

「ああ？ それがどうし……」

音が聞こえた。これはトラックの走ってくる音だ。

ガキは気づかずに、公園から道路へ飛び出す。俺の方へと向かってくるボール目指して、真っ直ぐに走ってくる。

やべえ！

「おいガキ止まれ！」

「え？」

しまった——そう思ったが、遅かった。

俺と目が合ったガキは、道路の真ん中で止まりやがった。

くそがつ！ まだ間に合うかもしれねえ！

「くそがああああああ！」

咄嗟に地面を蹴った俺の手はギリギリで届き、なんとかガキを突き飛ばす。

後は、俺もこのまま避ければ大丈夫だ。

だが……そんな時間はなかった。トラックは、もう真横にいやがる。

やべえ、死んだわこれ。

そう思った、次の瞬間だ。

ドンッ！ と強い衝撃が、俺の全身に走った。

トラックに吹つ飛ばされ、地面に落ちるまでの短い時間のはずなのに、世界がスローモー

ションに見えるやがる。

これがあるか、走馬灯つてやつか。

俺を見てビビってる奴と、泣いてる奴しか見えねえぞ。

これで終わりか。ビビられ泣かれて、嫌われて終わるのか……。

そこで俺の意識は落ちた。



「くそが……」

あん？ 手が動く？ 痛みもねえ。体も問題ねえ。

俺は体を起こし、周囲を見回した。

見渡す限りの大量の本に、漂ただよう埃臭ほじりくさ。

なんだこりゃ。トラックに吹っ飛ばされたと思ったら、図書館にいるじゃねえか。

……いや、普通の図書館じゃねえな。どこまで続いているのかも分からねえし、異常なくらい本がありやがる。

バサバサッ。

本の崩れる音に、俺は慌てて振り向いた。

「ごほっ、ごほっ。うえー、やっぱり掃除係を雇よったほうがいいかな。……おや？ お客

さんかな？」

ほっそい体をした、眼鏡で黒髪の兄ちゃんがいた。

司書ってやつか？ 青白い顔や雰囲気が、まんまそれだ。

じっと見ていると、当然のように目が合う。だが、すぐに逸そらされた。……いつものことだ。

「え、えーっと……」

兄ちゃんは俺にビビッてやがるが、そんなことはどうでもいい。俺は自分の知りたいことを聞くことにした。

「おい、ここはどこだ」

「はい！ 記憶や記録の集まる場所です！」

何言ってるやがるこいつは。記憶？ 記録？ 図書館じゃねえのか。

「意味が分からねえ。俺はなんでここにいる」

「え？ なんでって……。ちよ、ちよっと調べさせてもらってもいいかな。いえ、いいですかね？」

「ちっ。好きにしろ」

何やら本を開いたり閉じたり、取ってきたり戻したり。

なんだこいつ。俺のことが本の中に書いてあるわけねえだろ。

それともこんな頼りねえ感じだが、実は医者かなんかなのか？

「あー。はい！ ありました！ 真内零。高校二年生。子供を助けようとし、トラックに轢ひかれ死亡。合ってます……かね？」

いちいち俺の顔を窺うかがってんじゃねえよ。イラつく『もやしメガネ』だ。

「合ってるけど、合ってるねえ。俺は生きてんだろ。それとガキは無事だったのか」

「は、はい。子供は擦すりむいたくらいで無事でした！ 後、その……あなたは間違いなく

死亡しています」

「だから生きてんだろ」

なんなんだこいつは。頭おかしいんじゃないかねえのか？ 話を通じる気がしなくなってきたぞ。

「えっと、ここは生きている人間は来れないんです。ですから、あなたは本当に死亡しています」

「生きてる人間は来れねえ？ 死亡してる？ つまり死後の世界ってやつか」

「は、はい。そんな感じですよ」

ちっ。死後の世界とか本当にあつたのか。どうせ死んだら、みんな消えるだけだと思っ
てたんだがな。

……死んだ、か。そうか、俺は死んだのか。改めて言われても、あまりショックはねえ。
どうせ嫌われ者だったしな。ガキが無事だったんなら、これで終わりでも上等か。

「分かった。もういい。あんまり信じられないが、俺は死んだ。で、俺はこの後どうした
らしい」

「理解が早いですね。認められない人のほうがすく多いんですけどね」

「どうせ生きてたって、ろくでもなかったからな。ガキを助けて死んだなら……まあ悪く
ねえよ」

「そ、そんなことはありません！ あなたが死んで、悲しむ人だっています！
いねえよ。」

だが、口には出せなかった。それはすごく悲しい言葉で、言ったら事実だと認めること
になる気がしたからだ。知ってたつもりでも、自分では言えねえもんだな。

「ちっ。それはいいからよ。俺はこの後どうしたらいいかって聞いてんだ」

「良くありません！ これを見てください！」

もやしメガネは、懐から丸っこいものを取り出して俺に突き出した。

あんだ？ 水晶か？ 占い師とかが使うあれだよな。

「よく見てください」

「お、おう」

さっきまでは俺にビビってたくせに、凜とした態度で俺に話し始めやがった。『もやし
メガネ』から『メガネ』に昇格させてやるか。

覗き込むと、水晶の中に何かが浮かび上がってくる。

ん？ なんだこりゃ。水晶に映っているのは……俺の葬式？ なんであいつら泣いてや
がんだ。

「見えますね。あなたが死んで、悲しんでいる人たちの姿が」

俺は、何も言えなかった。

俺を利用してると思ってた取り巻きの数人。いつも俺にビビってた妹。学校の何人か。

「零さん！ 零さんなんで死んじゃったんすか！ 無敵だったじゃないすか！」

「おにいちゃん！ おにいちゃあああああああん！」

あんだよ。俺が嫌いだったんじゃねえのかよ。

あいつら、何勝手なこと言っただよ。

荷物を持ってくれた？ 自分から手を出すような人じゃなかった？ 目が怖い？ うるせえ！

あんだよ、これ……。

「あなたは怖がられていたかもしれませんが。でも、嫌われてはいなかったんです」

「そんなこと、今さら知ってどうすんだよ。もう俺は死んじまったじゃねえか。それに両親は、肩の荷が下りたような顔をしてるぞ」

「ええ、そういう人もいますでしょう。でも、それだけじゃないということを知って欲しかったんです」

「……おう」

くそつ。目にゴミが入りやがった。視界が歪ゆがんできやがる。

……俺が気づいてなかっただけなのかよ。

でも、もう死んじまった。今の俺には、どうもできねえ。

このメガネになら、なんとかできるんだろうか。なんとなくそんなことを思ってしまった、俺は聞いてみることにした。

「なあ」

「はい」

「何か、なんでもいいんだ。あいつらに、何か伝える方法はないのか」

「すみません……」

メガネは申し訳なさそうに頭を下げた。

「そうか。無理言っただな、悪かった」

まあ、そりゃそんな都合のいいことはねえよな。

でも、少しでも救われた気がしやがる。水晶の映像が本当かも分からないのに、俺も単純なもんだ。

「ありがとよ。もういい」

「分かりました。すみません、見せることしかできなくて。でも、知って欲しかったんです」

「おう、十分だ。ありがとよ」

俺はメガネと目を合わせないようにして、涙を拭ぬぐった。ばれてねえよな？

深呼吸をして自分を落ち着かせる。後はメガネに聞くべきことを聞こう。

「で、俺はこの後どうなるんだ」

「はい。そのことで一つ提案があります」

提案？ 提案って、天国か地獄に行くだけじゃねえのか？ まあ今はいい気分だからな、どっちでも構わねえや。

「あなたには転生をしていただくと思います」

「転生？」

転生ってなんだ？ 生き返るってことか？

「残念ながら、元の世界に戻すことはできません。ですが、異世界にあなたを転生させることができます」

「そうか、よく分かんねえ。どういうことだ？」

「えっと……第二の生を歩むということです」

「第二の生？ もしかして、みんな死んだら別の場所で生き返るのか？」

メガネはクスタス言いながら首を振ってやがる。何笑ってんだこいつ。

「本当は厳密な審査があるんですがね。あなたに関しては、僕の権限で転生を許可します」
権限とか、メガネがなに偉そうなこと言ってるんだ。

それとも偉いメガネだったのか？

いや、このなよっちゃん面は下っ端だ。間違いねえ。

「さて、それでは転生させますね」

「おい、俺の返事とかそういうのは……」

「聞いてません！ 転生してもらいます！」

「提案じゃなくて強制じゃねえか！」

俺の話が無視して、書類？ ファイル？ を開いて、なんかダイスみてえなもんを振ってやがる。

まあ、あとで説明くらいはしてくれんדר。

それに、第二の生か。そういうのも悪くないかもしれねえ。……今度はもうちょっとうまくやる努力をしねえとな。

「はい！ 決まりました！」

「おう。どこに行くことになったんだ。アメリカか？ フランスか？ それとも東京から北海道になるとかか？」

行ったことねえ場所でも、それはそれで楽しめるだろ。旅に出る気分で、少しわくわくするな。

「いえいえ、魔法と精霊の関係が密な異世界です」

「は？」

「転生者には一つスキルを渡すことになっています。愛されなかったあなたにあげるスキルは、これです！ 『精霊に愛されし者』！」

「いや、だから待ってって」

「では、いつてらっしゃい!!」

「待ってって言うってんだろ!?!」

全身に走る悪寒。地面に体が引っ張られていく。いや、これは引っ張られてるんじゃないねえ!

穴? 穴かこれ!? 足元に穴!?

落ちる、落ちる、落ちる!

「説明なさすぎだろおとおおおとおお! お前は何者だっただんだあああああああああああー!」

力を振り絞り、落下しながら質問を投げかけるが――

うとおおおとおお! まじで落ちてるぞこれ! こんなに落ちたら、結局死ぬじゃねえか!

「すみません。自己紹介もしていませんでしたね。一応自分は、死後の世界の最高責任者。あなたに分かりやすく言うと、神様ですかね。では頑張ってください!」

は? 神様? お前は下っ端メガネじゃねえのか?

そんなことを考えながら、俺の意識は体と一緒に闇へ落ちていった。

第二話 なんだこいつら、可愛すぎだろ

――なんだ、俺は寝てんのか?

体が動かねえ。何かが体の上を動いてやがる……。虫? 虫か!?

「ああ!? なんだこら!!」

「!!」

俺は、気合を入れて体を起こした。

ああ? 何か走って隠れたぞ。虫か? まだ体についてんのか?

体をあちこち確認してみるが……いや、もう何もついてねえ。

てか、どこだここは。

辺りを見渡して目に入るのは、木と草ばかり。

森? 草むら? あんで俺はこんなところに寝てんだ。

……やべえ、夢遊病ってやつか?

確か俺は、学校から帰るとここで……。そういや、公園からガキが出てきて、トラックに……。俺は死んだ? 神だの転生だの聞こえたような?!

「体も痛くねえ。つまりここが、異世界ってとこか？」

ところで異世界ってなんだ？ メガネはなんて言ってるやがったつけ。

「えーっと、海外がなんとかって……違え、それは俺が言ったんだ」

分かんねえ。異世界ってなんだ？

そうだ、いきなり穴に落とされたんだ。

あのメガネ、説明くらいしろや！ 大体、神ってるんだ！ 本当にそんなのいたのかよ。

「ちっ。これからどうすりゃいいんだ」

周りは森しかねーしなあ。とりあえず森を出て……うおっ！ 背筋がぞくつとした。虫か？

「くっそ、まだ残ってるやがったのか！ どこだ!? 背中？ 違え！ ……首元か！ 捕まえたぞ、おら!!!」

首の後ろ側に右手を回し、鷲掴みにしてやった。

……なんだこりや。虫？ 違えな、なんだこれ。石？ なんか白いものが生えてるな。

とりあえず引つ繰り返してみつか。くるつとな。

「は？」

はああああああ!? なんだこれ！ なんだこれ！

石を被ってるガキ!? ……違え！ 手のひらサイズのガキはいねえ！ 小人!?



「は？　なんだてめえ！　あんで俺にくつついてたんだ！」
顔を手で隠してふるふるしてやがる。なんだこいつは。

「おい、聞いてんのか？　話せるか？」

うお、今度は首をすげえ勢いで横に振りやがった。どうやら、話せないみてえだな。

「あー。俺の言ってることは分かるか？」

何度も頷うなずいている。分かるってことか。

それにしても、こいつなんでこんなに震えてんだ？

……そうか、そりゃそうだ。俺の目え見てビビってたんだ。忘れてた。

そうだよ。これからは、もうちょっと頑張って周りの奴と仲良くなるって決めたんだっ
たな。

目を隠して話してみるか。悪いことしちまったな。

とりあえずこいつを膝ひざの上に置いて、両手で目を隠してっと。

「おい。これで怖くねえか？」

……いや、だめだろこれ。こいつ話せねえのに、俺が目を隠しちったら何も見えない
じゃねえか。

くそつ。これがあれか、異文化交流ってやつか。噂通り、難しいもんだな。

とりあえず指の隙間すまみから覗のぞいてみつか。直接見るよりはいいだろ。そーつとな。

「……は？」

ちよつと待て、なんだこれ。

もう一回見るぞ。そーつと……。

「はああああああ!?　なんでお前増えてんだよ！」

すげえたくさんいるじゃねえか！　十体くらいいるんじゃねえか？

はつ、もしかして俺の体に最初くつついてたのはこいつらか？

よく見りゃ、俺の真似まねして手で目を隠してる。

なんだこいつら、可愛すぎだろ。やべえな、かなりやべえ。くつそ可愛いぞ。

よく見ると、石だけじゃなくて木や花とか水滴たまりみたいなのを頭に被かつてる奴もいるな。

すげえ可愛いじゃねえか。

でも、まだ震えてんな。……もしかして俺が怒鳴ったからか？

よし、優しく話してみつか。とりあえず、自分なりに笑顔を作って……。

「おう。……おう」

優しくってどうやってやんだ。分かんねえ。

笑顔作ろうとしたら、頬がひくひくしやがる。だめだな。

まあ、優しく話してるつもりで頑張ればいいな。よし、そうするか。

「俺はあれだ、零ろつっーもんだ。お前らはなんだ？　俺になんか用事でもあんのか？」

うお、両手広げてびよんびよん飛び跳ねてやがる。
 とりあえず頭でも撫でてみるか？ 確か、頭あ撫でたらどんな女でもイチコロだとか、俺の周りにいた奴らが言ってるやがったよな。

そもそも、こいつら女なのか？ ……まあいいか。

「おう、悪いな。何言ってるか分かんねえわ」

とりあえず撫でてっと。

あん？ なんでこいつら急に近づいてきてんだ。

そうか、異文化交流ってやつも頭を撫でればうまくいくのか。あの馬鹿どもの話もたまには使えるじゃねえか。それにしても首傾げてる様子が可愛すぎるだろ。

てか、俺のこと怖くねえのか？ 聞いてみるか。

「あー。お前ら、俺のこと怖くねえのか？ 目、怖えだろ？ よく言われるからよ。無理して近づかなくてもいいぞ」

すげえ勢いで全員首を横に振ってやがる。俺のこと怖くねえのか。……やべえ、なんか泣きそうだ。

「そうか、ありがとな。頭撫でてやるよ」

俺、一生この森にいてもいいわ。

神様も粋な計らいをしやがる。あのメガネが神様ってのは信じねえけどな。

ん？ なんか石の被り物した奴の様子が変だな。ふるふるしながら、指をこつちに突き出してやがる。

あー、これあれか。ガキの頃になんかの映画で見たな。友達だっけか？ くそつ、嬉しじゃねえか。

「ははっ、おらよ。これでいいか」

ん？ なんだ？ 他の奴らも俺に指を突き出してやがる。

けっ、いいぜ。こうなったら全員やってやるよ。ついでに頭も撫でてやらあ！

「おし！ いいぞ、全員やってやる！ 手は二本あるからな、二列に並び！」

おお、とてとてと歩いてきちんと並びやがった。

あんだ、保育士ってやつはこんな気持ちなのか？ 俺、今回の人生は保育士になるのも悪くねえわ。

とりあえず片っ端から頭を撫でて、指を合わせりやいいな。たかだが十体くらい…。

「あん？ なんか、お前ら増えてねえか。いや、増えてるよな!? 倍くらいになつてねえか？ 分裂したのか!? あー、まあいい。構わねえ！ 男に二言はねえ！ 全員かかってこい！ ただし列は乱すじゃねえぞ」

倍になつたくらいでガタガタ言う俺じゃね…。

いや待て。増えてる。

「お前らどんどん増えてねえか!? どんだけいるんだよ! くそつ上等だ! やつてやらあ!」

……ちつ。結構時間かかったな。しつかり数えてみたら、五十三体もいたぞ。

「うっし! これで終わりだ。ちよつと聞きてえことがあるから、分かることがあったら教えてくれるか」

おお、にこにこしながら首が取れそうな勢いで頷いてやがる。本当に可愛いな。

俺をぐるりと囲むちつこい奴らを見渡して、質問する。

「そうだな。まず、お前らはなんだ? 小人か?」

……どうやら違えみてえだ。一斉に首を横に振った。

「えーつと。人間か?」

首、横に振ってるな。そりゃまあ違えよな。明らかに小せえし。

「じゃあ、どつか町とかある場所、知ってつか?」

おお、全員揃って同じ方向を指差したぞ。しかもちよつと誇らしげな顔してやがる。頭でも撫でてやるか。なでなで。

「とりあえず、もう夕暮れになってっからなあ。町は近えか?」

ふむ。どうやら近くねえみてえだな。

「しょうがねえな。どつか寝れるところあるか? あとは飯とか食べる場所があれば、教えて欲しいんだけどよ」

なんか少し困ってるな。段々こいつらの考えてることも分かってきた。

ん? こつちに來いってか。いいぜ、俺はお前らを信じたからな。この先が崖でも怒らねえぜ。

俺は立ち上がって、手招きされた方向に歩き出した。

なんか、周りをぴよんぴよん飛び跳ねてる奴らと一緒に進むって楽しいな。和むわ。

何体かは俺の頭や肩に乗ってやがるが、別に嫌な感じはしねえ。

とりあえず気になることは、肩に乗っかてる奴に聞いてみつか。

「これ、どこに向かつてんだ? なんかいい場所知ってるのか?」

首を縦に振ってることは、知ってるみてえだな。

そういや、こいつらって何食うんだ? やっぱ俺がその辺で鳥とか捕まえないといけねえのか? でも、ナイフも何もねえんだよなあ。

少し歩くと、森の中でもやや開けた場所に着いた。洞窟もある。

「ここ、お前らの家か?」

首を横に振ってんな、家じゃねえのか。つてことは、俺のために案内してくれたのか。「悪いな。これなら雨が降っても大丈夫だわ、ありがとな」

おお、全員ピョンピョン両手上げて跳ねてやがる。くっそ可愛い。写真にでも撮^とりてえな。俺、カメラマンになってえって今初めて思ったわ。

ん？ なんかいい匂いがすんな。

洞窟の入口に近づいてみると、火にかけられた丸いもんが見えた。

ありゃ鍋^{なべ}か？ もしかして飯か？

確認するため、洞窟に向かって進む。近寄ってみると、やっぱ鍋だった。野菜(?)みてえなもんがごろごろ入ってて、すんげえうまそうだ。

「お前ら、飯作ってたのか。ん？ 皿？ 俺も食っていいのか？ そうか、ならんか手伝わないといいねえな。鍋は俺が混ぜてやんよ」

俺が鍋をかき混ぜだすと、チビ共は嬉しそうにした。

何体かはうまいこと石に乗って、そこから鍋に色々山菜みたいなのを入れている。器用なもんだ。あー、いい匂いがすんな。腹が減ってきやがった。

すると完成したのか、水滴の被^{かぶ}り物をしたチビが喜びながら俺に器とスプーン(?)みたいなもんを差し出した。

じゃあ食わせてもらうか……ってあれ？ 器持ってるのは俺一人じゃねえか。

「おい、お前らの器も持ってこい」

俺の言葉に反応して、慌てて全員器を持ってきやがった。どっから出したんだが分から

んが、まあいい。やっぱり飯はみんなで食わねえとな。

うっし、全員に行きわたったか。

「じゃあ、いただきますっ」と

スプーンで軽くすくって口に運ぶ。

……なんだこれ、くっそうめえ。

「なんだこれ！ くっそうめえな！」

思ったことが口から出るとは、こういうことか。チビ共も大はしゃぎだ。

とりあえずその日はみんなで飯食って、チビ共が用意してくれた寝床で横になった。

明日は町に向かってみるしかねえかなあ。

そんで……やべえ、考えられねえわ。すげえ眠^{ねむ}い。

そうやって意識が落ちる中、俺は一つのことを考えていた。

……あれ？ こいつらってどうなるんだ？ 町に連れてけるのか？

答えは出ねえまま、俺は幸せな気持ちで眠りに落ちた。

第三話 てめえら調子くれてんじゃねえぞ！

——おお、今日もいい天気だな。

洞窟から顔を出し、空を見上げると、眩しいお日様が見えた。

あれから五日経って、森での生活にも慣れてきた。今日は兎でも捕まえて、晩飯を豪勢にしてやるか。いや、魚を釣るのも悪くねえなあ。

チビ共が色々教えてくれたから、食料調達もどうにかできるようになってきたぜ。さて、今日も頑張るとすっかかな！

出かける準備をしようと振り返ると、足元でチビ共が何かしてるのが目に入った。

「ん？ あんだチビ共。おお、絵を描いたのか。うめえじゃねえか。三角に四角か、家みてえだな」

絵を見ながら、俺はそれを描いた花の被り物をしたチビを撫でてやった。

頬つべたはぶにぶにしてるし、撫でると喜ぶしで、たまんねえな。

「新しい家が欲しいのか？ なら、造り方教えてくれたら俺がやるからよ。いい場所があるか？ それともここに……違うのか？」

首を横に振ってやがんな。何が言いてえんだ？

他のチビ共も一緒になって、たくさん家みてえのを描きだした。

家、たくさんさんの家……たくさんさんの家？

「あ」

そうか、町だ。俺は町に行くって、こいつらに言ってたんだったな。

「いやでも、もういいんじゃねえか？ 俺はここで一生過ごすわ」

そして零は森の中でチビ共と幸せに暮らしましたとさ。完。

——で、いいと思ったんだがなあ。

どうやら、チビ共はそれじゃ駄目らしい。

もしかしたら外の世界が見たいのかもしれないねえな。俺の服を引っ張って、必死に町へ連れて行くこうとしてやがる。

まあ、こいつらが言うなら仕方ねえか。

「おし、分かった。じゃあ町に行ってみるかあ」

俺とチビ共は身支度を整え、森を出ることにした。

くそつ。五日間だけだったのに、天国みてえな場所だったな。ここから離れると思うと、少し泣けてくるぜ。

俺はチビ共に案内されながら森の中を進んだ。なるべく歩きやすい道を選んでくれてるらしくて、さくさく進む。こいつら本当に気が利きやがるな。

「なんだかよお、ピクニックみてえだよな！ こういうのも悪くねえ」

俺の言葉に、チビ共は大喜びで飛び跳ねてやがる。

そうか、そうだよな。よく考えたら、町つてのもこいつらの町かもしれないねえ。

ってことは、だ。そこに行けば、こいつらの仲間がたくさんいるのか！ いいじゃねえか！

俺はこのとき、こんな勝手な想像をしていた。そんなわけねえのになあ……。

少し進むと、森を抜けた。目の前には草原（？）がすげえ広がってる。

その草原の中には、長え道が通っていた。

「あんだこれ、石で舗装してあんのか？ 街道つてやつか」

チビ共は俺のことを考えて、石畳み（？）の道のほうが、森よりも楽だと思ったのかもしれねえ。これまでも歩きやすい道を選んでくれてたからな。

だが、俺としては森の中のほうが歩きやすかった。何より、この道の固え感触がアスファルトを思い出させやがる。

ついで、振り返って森を見ちまう。まあ、でも新しいチビ共に会うためだからなあ。

つと、そこで俺を囲ってたチビ共の動きが変わった。

道の先を見てるみてえだな。何か変わったもんでもあるのか？

ありや……人、か？ 赤い髪をふり乱した女が、必死な様子で走っている。

おい、段々近づいて来てねえか。いや、間違いなくこっちに向かってきてやがる。

ちっ。ここはフレンドリーに接してみるか。この五日で、俺がこいつらとの異文化交流で学んだ技術を見せてやんよ！

あつという間に目の前にきた女。赤い目に、赤い髪……なんだ、セミロングつーのか？ 身長は少し低めだな。シャツにミニスカート、さらにマントを羽織ってて、俺よりちよつと年下に見える。

うっし、笑顔でしつかり挨拶してやるか。

「おう！ ちよつと止まれや。こんなところで何してんだ、てめえ」

「に、逃げてくださ……ひいひいひいひい！ ごめんなさいごめんなさい！ 私、悪い者じゃないんです！ どうか見逃してください！」

俺の顔を見るなり、女はすげえ勢いで何度も頭を下げた。

あれ？ なんかもつちやビビられてねえか。親しみやすく話しかけたつもりなんだが……。

「ちっ。待て待て、俺はてめえに危害を加える気はねえ。ただ話しかけたただけだ、安心しろ」

「すみませんすみません。お金なら持つてるだけ渡しますから！」
だめだ、話にならねえ。参ったな。

溜息をつきながら顔を上げ、前を見たんだが……。
ん？ なんだありゃ？ 緑色の変なのが二つ、こっちに向かってきてんな。

「おい、なんだあれ」

「ごめんなさいごめんなさ……はっ。追いつかれた！ 逃げてください！ 私はあれに追われてたんです！」

俺が聞くと、女は思い出したかのように緑色の奴の方を振り返り、突然慌てだした。

「なんだ、悪い奴なのか」

「なんで落ち着いてるんですか!? 早く逃げましょう！」

いや、逃げるのはいいんだけどよ。俺と目を合わせないようにしてる奴に言われるのもなあ。

あ、なんか少し悲しくなってきたわ。日本にいた頃はみんなこうだったんだが、こっちに来て忘れかけてたぜ。やっぱり森にいれば良かったなあ。

「何してるんですか！ 逃げないと！ あ、だめです。もう目の前にいる」

お、おお？ 騒ぐだけ騒いで、へたりこみやがった。

で、なんなんだよ、この緑の奴はよお。石斧(?) みたいな持って、こっちをニヤニヤ

見てやがる。

まあフレンドリーにだ、フレンドリーに。

「おう！ おめえら何か用か？ こいつビビってるからよお、ちよつと待ってくれねえか」
「グルルルル」

こいつら、俺のことをちよつとも見てねえ。別にいいけどよ。

人と話すときは目を合わせろって教わらなかつたのかよ、このダボ共が。

「に、逃げてください。こいつらは私が足止めます！」

這いつくばっていた女が、足をガクガクさせながら立ち上がる。

おいおい、そんな震えてんのに俺の前に出てどうすんだ。

手に持つてる木の棒みてえな……杖ってやつか？ そんな弱そうな鈍器どんきじゃ、こいつらに勝てねえだろ。向こうは斧だぞ。

それに、人間話せば分かるってもんだ。身振り手振りでも十分。俺はそれをチビ共から教わったからな。人間、日々成長つてやつだろ。

「まあ落ち着けて。まずは話をしてからでもいいだろ」

「モンスター相手になんで落ち着いて話そうしてるんですか!? 逃げてくださいって！」
モンスター？ モンスターってなんだ。ゲームとかにいるあれか？

確かにこの緑の奴は、それっぽいが。

「グガアアアアアア！」

いきなり緑の奴の片方が、斧を振りかざして俺に向かって……。

「ああ？」

止まった。

俺と目が合った瞬間に。

やつぱりこれはあれか、誠意ってやつが伝わったに違えねえな。

……そんなわけねえよな。この反応は、俺に喧嘩売ってきたチンピラ共と一緒にだ。

チンピラ共は自分からガン飛ばしてくるくせに、俺と目が合うと一瞬止まるんだ。じつ

と睨んでるから動きが止まるのか、俺の目にビビってんのかは知らねえ。

そのチンピラ共と同じってことは……こいつら、俺に喧嘩売ってんのか？

……だったら買うしかねえ。

少なくとも睨みつけてきてる目が反抗的ってことは、間違いねえよなあ！！

「てめえら調子くれてんじゃねえぞ！！」

俺は緑の奴の片方に勢いよく突っ込んで、前蹴りをぶち込んでやった。

おお、ボールみたいに吹っ飛びやがった。

「ギ!？」

残った緑の奴は、目ん玉むいて飛んでいった仲間を見てやがる。

「よそ見してんじゃねえぞ、こらあ！！」

喧嘩の最中にやられた奴の心配とか、舐めてんじゃねえぞ！

俺はもう一体の緑色の斧を左手で掴んで、思いっきり……右ストレートだおらあ！！

「おらああああああああ！！」

「グギイイイイイ!？」

右ストレートは、気持ちいいくらいに綺麗に決まった。

うっし。両方ぶっ倒れてピクピクしてやがる。

「え？ え?」

赤髪はぼかーんと眺めている。喧嘩慣れしてねえ奴は、大体こんな反応だ。

さてっと。

俺はぶっ倒れた緑二体に近づぐことにした。

「ち、近づいたら危険です！ まだ動けるかもしれませんが。逃げるなら今のうちです！」

これだからトーシロは……。

俺は赤髪の言葉を無視して緑の奴らに近づいた。

そして、そいつらに……蹴り！ 蹴り！ 蹴り！ 蹴り！ 蹴り！

「おらおらおらおらおらおら！！ 寝たふりしてんじゃねえぞこら！！ やんのかおらあ！！」

「ガフツ、ゲフツ」

「ひいひいひいひいひい!!」

緑共を交互に蹴っていると、うめき声が聞こえやがる。赤髪の悲鳴も交じってる気がするが、そんなことはどうでもいい。

やられたフリをするなんて、喧嘩の常套手段だからな。

「きつちり地獄に送ってやらあああああああ!!」

「待つて待つて待つてください!! 本当お願いします待つてください!! だつて泡噴いてますよ!? もういいですつて! 本当ごめんなさい! あ、もう無理……」

ちつ。うざつてえな。

俺は仕方なく、なぜか謝ってる赤髪に従って蹴りをやめてやった。まあこれだけやっておけば、すぐには立てねえだろ。

振り返ると赤髪は気絶してやがる。ちつ。これだから慣れてねえ奴は面倒くせえ。

……そういや、チビ共は大丈夫か?

俺が周りを見渡すと、チビ共は楽しそうに泡噴いて伸びてる緑の上で飛び跳ねていた。

ははっ、分かってんじゃねえか。やっぱりこいつらは最高だな。

このまま放置もできねえから、俺は赤髪を抱えてチビ共とその場を離れることにした。おっと、ついでに便利そうだから、この石斧は一本もらつてくぜ。

第四話 で、魔法つてなんだ?

しばらく歩いた俺とチビ共は、街道から外れた草っぱらの上に赤髪を寝かせて、起きるのを待った。

……待った、ものすげえ待った。声もかけた、肩を揺すったりもした。

「なんだこいつ、全然起きないじゃねえか」

むしろ、少し幸せそうな顔で涎を垂らしてやがる。

「えへ、えへへへ。駄目ですよお。私とこんなにくっさん契約したいだなんてえ。えへへへ」

駄目だ、話にならねえ。

諦めた俺はチビ共と相談し、ここで野営をすることにした。

ふざけやがって。もう夕暮れだぞ。

俺は焚き火のために木を集めて組み、火打ち石をカチカチ鳴らし始める。

その音に反応したのか、赤髪が目覚めました。

「はっ。精霊! 精霊? ここ? え?」

体を起こしてきよろきよろしながら、わけ分かんねえこと言ってる。

完全に寝ぼけてやがるな。面倒くせえ……。
 だがまあ、フレンドリーだ。今度こそ、うまく話さないといけねえな。

「おう。落ち着け。もう危険は……」

その時、赤髪と目が合った。

目を逸らされた。

二度見。

「ひいひいひいひいひいひい!! すみませんすみません! 売らないでください!」

「お、おい」

「私、結構いいところのお嬢様じょうさまです! でもお金になりませんから! なんでもしますから! いえ、なんでもはできません。あ、お金なら払います! ですからお願いです、何もしないでください!」

駄目だ、完全にテンパってやがる。とりあえずなんとか落ち着かせないといけねえなこりゃ……。

「落ち着けて、俺あ別にお前に何かしようとは……」

「何かしたんですか!? 嘘うそっ! わ、私そんな寝てる間に……。いや、そんなの嫌……。だって私、最初は白馬の王子様とって決めてたのに……」

赤髪の奴、頭抱えて横に振り始めたぞ。全然聞いてねえな。段々イライラしてきたわ。

立ち読みサンプル はここまで

ヤンキーは異世界で精霊に愛されます。1

いや、異文化交流だからな。もうちょい我慢だ……。

「だから聞けて。俺は別にお前に何も……」

「私、もうダメなんです。このまま売られちゃうんですね。穢けがれちゃったんですね……。そんな、私はただみんなに認めてもらいたかっただけなのに、こんなことになっちゃうなんて……」

はははっ。

ははははっ。

悪い、もう無理だわ。

「ちよっと黙れやこらあああああああ! 俺の話を開けこのダボがあ!」

「ひゃい!」

ふう。怒鳴ったら、やつと静かになりやがった。これで落ち着いて説明がききな。なんかプルプル震えてるが、それはもうこの際置いとくか。

「ちつ。よく聞け、俺は何もしてねえ。てめえが気絶したから連れてきただけだ。縛しばったりもしてねえだろうが。まあ信じられねえだろうからもういい。さっさと失うせろ、くそが!」
 よし、なるべく抑おさえて言えたな。フレンドリーだっただろう。

やっぱりチビ共以外は信用ならねえな。さて、俺は野営の準備でもすつか。

俺は火打ち石をまたカチカチとやりだした。もうちよっとで点おきそうなんだが、これが